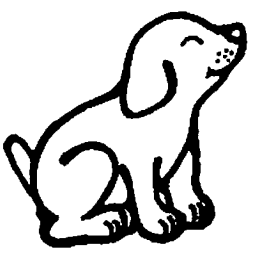
玉川教会たより

NO,467

9月21日

もの言わぬ盲導犬にまで

▼週に2回ほど乗る新宿発18時のロマンスカーで、決まって盲導犬を見かける。何回か、同じ車両になった。入り口に一番近い、一人がけの席に、中学生だろうか高校生だろうか、男の子が座り、その横に、大きな白い犬が、ドデッと、横になって寝ている。少しばかり通行の邪魔になるのだが、それに苦情を言う人は見たことがない。誰もが、犬を起こさないように気遣って、そっと横をすり抜けるようにして通る。



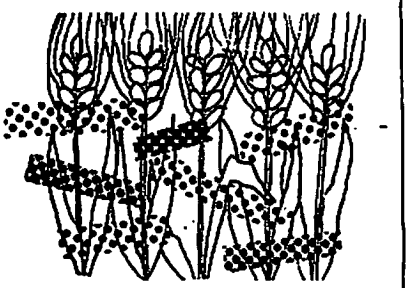
▼盲導犬はその仕事ゆえに緊張を強いられ、短命だと聞いた。大ヒットした映画とテレビで、その事実を知った人は多いと思う。だから、少々邪魔でも、文句を言うどころか、誰もが、「ご苦労さん、お疲れなのね」と声を掛けたい思いで見守る。勿論、誰も声は掛けない。邪魔になるから。そのことも、誰もが常識として知っている。

▼盲導犬がナイフで刺されたというニュースを聞いても、にわかには信じられなかった。そんな心ないことをする人間がいるとは、理解を超えた出来事だ。犬は、声一つ出さなかったそうだ。だから、他の人が犬の出血を見るまでは、飼い主は出来事に気づかなかった。犬の何とけなげなこと。犯人は未だに分からない。

▼犬をナイフで刺すという仕業が、既にまともな人間の所業ではないが、相手が盲導犬というのは、あまりにあくどい。盲導犬はその任務のために、何があっても、吠えたり駆け出したりしてはならない。それは直ちに、ご主人の危険となる。だから、この犬も、ナイフで刺されながら、声一つ立てなかった。何としおらしい。何と、むごたらしい。

▼もの言わぬ者を、もの言えぬ者を傷つける事件が頻発している。幼児を、我が子を、底辺労働者（敢えてこの表現を用います）を雇い主が。どんな歪んだ心が、これをなし得るのだろうか。犯人自身が、地獄を見るような体験に苦しんだ結果、その心の傷なのだろうか。

▼昔、サイレントマジョリティーという言葉があった。もの言わぬ群衆。今は、サイレントマイノリティー、もの言わぬ少数派か。



▼つい先日、山北宣久牧師と、新幹線で一緒し、いろいろと話し込んだ。教団議長や青山学院長まで努めた人だが、かねて自分を人間サンドバック、ボクシングの練習に用いられる砂袋、だと自認する。他の人に叩かれ、蹴られるだけだということ。まあ、確かに教団議長時代を振り返れば、その通りかも知れない。山北牧師ほどのカリスマ性を持ち、能力を持っていても、牧師は人間サンドバックなのだ。

▼では私なんか何でしょうね、と話を膨らませたら、結論は、くずかごに落ち着いた。教団新報主筆時代も、今の出版局長も、原稿を書く仕事が多いが、文筆業とはとても言えない。人が書き散らした、或いは反故にした紙くずの捨て所、くずかごだ。紙くずは基本資源ゴミ、紙くずなら未だいいが、時に生ゴミまで捨てられる。ゴミ箱だ。

▼山北牧師も、自分だってくずかごだ、ゴミ箱だと言う。人間サンドバック、兼、人間ゴミ箱。大変なことだ。この話を妻にしたら、「人間サンドバック、兼、人間ゴミ箱の奥さんはたまらないね」。

▼牧師はもの言わぬ犬ではなくて、しゃべる盲導犬かも知れない。しかし、しゃべるのは、聖書の言葉だけだ。刺されても、石を投げつけられても、ののしり返してはならない。投げ返してはならない。神に忠実であるためには、ただ聖書の言葉を語るだけだ。こうして、福音は伝えられて来た。

194－0041　町田市玉川学園4の5の32　TEL. 042－732－9321